

記憶に残る景観体験に関する考察 — 熊本市白川「緑の区間」を対象として —

鶴菌 敦也¹・星野 裕司²

¹正会員 修士 (工学) 株式会社オオバ
(〒810-0074福岡県福岡市中央区大手門1丁目1番12号大手門パインビル)

E-mail:atsu_tsuruzono@k-ohba.co.jp

²正会員 博士 (工学) 熊本大学准教授 くまもと水循環・減災研究教育センター
(〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2丁目39番1号)

E-mail:hoshino@kumamoto-u.ac.jp

本稿では、人々の暮らしの中で、個人の大事な景観体験が日常的に生まれる場の創出に向け、利用者自身の最も記憶に残った景観体験を構成する意味に内在する要因と、それらの要因間の関係を明らかにし、記憶に残る景観体験の特性について理解することを試みた。利用者の記述を要因ごとに分類した後、各体験者にみられた4つの眺め方に着目し、定量的分析、定性的分析を行い、その特徴を考察した。また、記憶に残る景観体験に共通する要因の役割や、その働きについて、整理した。

キーワード: 景観体験, 記憶, 日常風景, 景観デザイン, 風景論

1. はじめに

(1) 背景と目的

近年、人々の活動の受け皿となる、魅力的な景観をデザインすることが求められてきている。これに向け、景観工学の分野では盛んな研究が行われているが、景観デザインの目的とは一体どのようなものなのだろうか。例えば、多くの人が利用する使いやすさであったり、写真をたくさん撮られる綺麗さなども、景観デザインの目的には含まれているであろう。しかし、それだけなのだろうか。魅力的な景観がある場では、その場で人々の利用を通じて景観体験は蓄積され、それは個人の暮らしを支える重要な役割を持つと考える。人々の暮らしの中で、このような個人の大事な景観体験が日常的に生まれる場をつくり出すことも、景観デザインの重要な目的だと考える。そこで、以上の目的の達成に向け、公園や広場など、ある一定の領域を保持した対象地において、利用者の大事な景観体験であると考えられる、記憶に残った景観体験に着目する。その際、日常的な利用の経験を通じて各利用者が想起する景観については、その景観に対し主体に関わる要因が多様であることが想定できるため、シーンの分析を行うのではなく、景観をどのように捉えているのか、またそれはなぜなのかについて、連続的な景観体験として着目することが望ましい。

以上を踏まえ、本研究では、今後の景観デザインへ活

用することを目指し、利用者の経験を通じて、利用者自身に内在する最も記憶に残った景観体験を構成する意味に内在する要因と、それらの要因間の関係を明らかにし、記憶に残る景観体験の特性について理解することを目的とする。

(2) 本研究の位置づけ

景観体験における経験や、記憶の抽出に関する研究は、様々な分野において行われているが、地域に対するイメージや景観特性についての古典的な研究のひとつに、K. リンチの「都市のイメージ」¹⁾が挙げられる。リンチは人々が生活する都市に着目し、抱かれる環境のイメージについて分析を行なっている。リンチのような、都市全体の大きな領域の中で景観の認識を捉える研究は国内でも多く見られ、例えば上田²⁾は、人々が思い描く景観イメージの空間的構造と意味構造を一枚のシーンスケッチとして抽出する手法である景観イメージ手法 (LIST) を構築した。この手法を基に、高瀬³⁾は、日常生活圏内の自然を対象とし、その景観体験の類型化を行なっている。また、尾野⁴⁾は、都市空間において記憶された経験のひとつである生活史に着目し、経験・記憶を構成する要素やその関係を詳細に分析している。

一方で、建築物や公園のような、スケールとしては小さい、ある特定の領域においての景観体験の経験や記憶についての研究も多く行われている。例えば、記憶対象

と記憶原因に着目し、住宅の記憶にあわられる空間性について研究を行なった中井⁶⁾や、小学校での思い出や記憶に残る場面を分析し、学校ごとにもつ空間特性を比較し考察を行なった山田⁶⁾ら、就学前の保育施設における成人の記憶に残る建築空間と活動場面に関する考察を行なった伊藤ら⁷⁾の研究がある。

以上の研究は、著者が調査・実験を行う際、一般的な利用者ではなく、被験者を特別に設定し、考察したことに共通点がある。

一方で、被験者を設定していない研究としては、人の認識に着目し、公園・広場の場の類型を行なった北山⁸⁾らの研究があるが、本研究のように利用者の経験や記憶に着目し分析するまでには至っていない。

以上より、景観体験における認識・記憶の抽出に関する研究は、暮らしの受け皿である都市空間としての大きなスケールのものから、小学校・公園等の小さなスケールまで、幅広く行われていることがわかる。しかし、これらの研究はあらかじめ著者が被験者を設定し、調査・実験を行なっているケースが多いことが特徴であるため、本研究では小さなスケールとしての、特定の領域を持つ場所における経験や記憶を抽出し、一般的な利用者（景観体験者）を対象として分析を行う点に新規性がある。

2. 研究対象・手法

(1) 熊本市白川「緑の区間」左岸

利用者の記憶に残る景観体験を分析するためには、まずは場に対して日常的な利用がみられる場を対象とすることは必須条件である。また、そこから多様な眺めができ、周辺空間も含めて景観対象が豊富に存在する場を選定することも望ましいといえる。

本研究の対象地である熊本市白川「緑の区間」左岸は、熊本市中心部を流れる白川に架かる、大甲橋と明午橋の間の、約600mの緑地区間である。ここは、日常的な利用がみられる区間であり、現在、白川夜市などの河川利活用イベントの会場としても利用され、広場の利用がしやすい区間でもある。

緑の区間および周辺に関する図を以下に示す（図-1）（写真-1-10）。なお、本研究において、「緑の区間」の領域の範囲は、左岸緑地及び緑地に面する川岸と定義する。

周辺は、右岸側に熊本市の中心商業地域があり、観光名所である熊本城も近い。左岸側には住宅地があり、隣には白川小学校もある。そのような対象地において、利用者の視点からは「緑の区間」内部にある、豊富な緑や、周辺の白川、立田山、鳥や樹木など自然環境がみられる一方で、ビル、大甲橋、明午橋、電車など、都市として

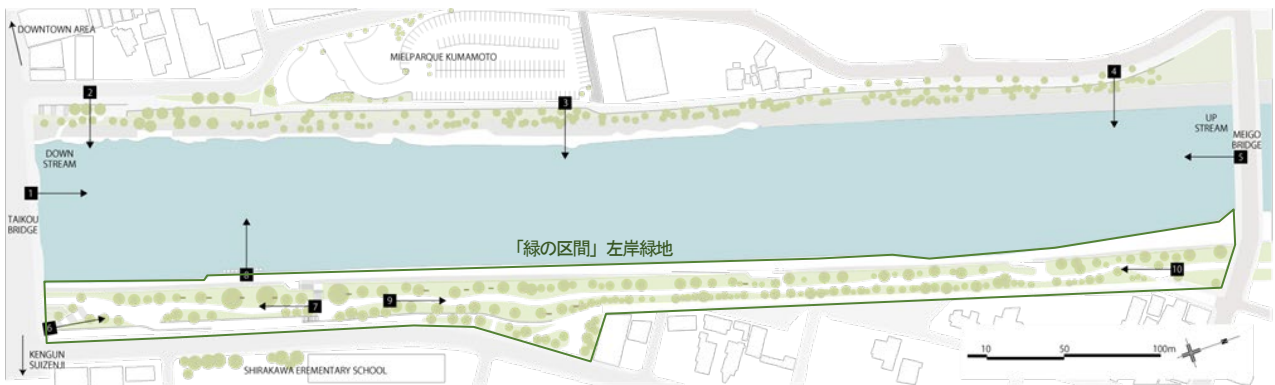


図-1 対象地平面図

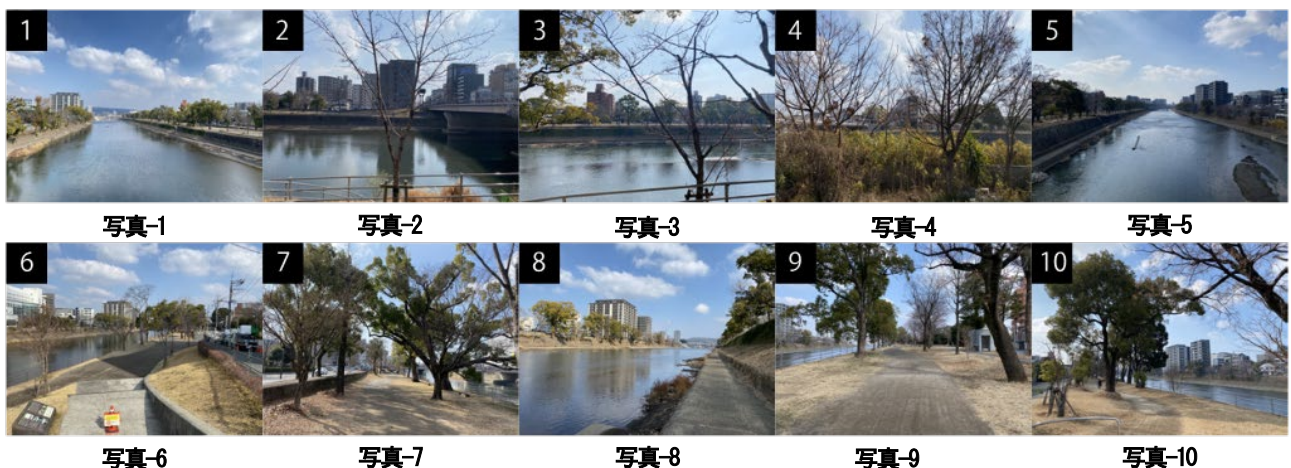


写真-1

写真-2

写真-3

写真-4

写真-5

写真-6

写真-7

写真-8

写真-9

写真-10

表-1 ヒアリング内容

選択式	その時の利用目的
	その時の利用人数
	その時の時期
	緑の区間の利用頻度
	年齢・性別
	視点場の位置
自由ヒアリング式	景観対象の位置
	視点場に対する印象
	主対象に対する印象
	副対象に対する印象

の景観対象も眺めることのできる対象地である。

(2) 研究手法

まず、緑の区間の左岸側の利用者を対象に、無作為にひとり当たり約10分程度のインタビュー調査を行った。調査は計10日間行い、59人の依頼者のうち46人に回答を頂いた。調査内容は、予め筆者が設定した質問項目に対し、マニュアル通りにインタビューを進めていくことのできる構造化インタビューを採用した。質問項目を以下に示す(表-1)。はじめに、個人の属性に関する質問を選択して頂き、続いて視点場及び、景観対象としての主対象、副対象の印象について自由に語って頂いた。後日、筆者がその時のICレコーダー (iPhone) の記録を基に、文字起こしを行った。

(3) 要因の分類化のルール設定

本研究の目的は、被験者自身に内在する最も記憶に残った景観体験に着目し、それを構成する意味に内在する要因と、それらの要因間の関係を理解することである。

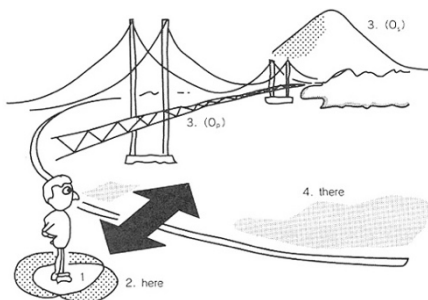


図-2 景観把握モデル (篠原)

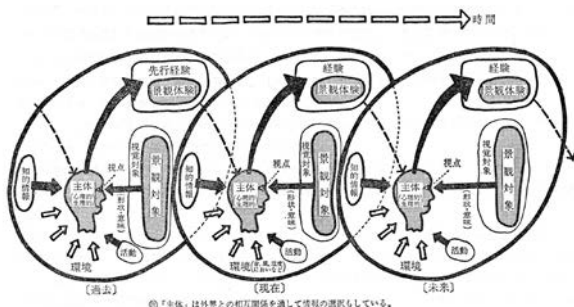


図-3 景観体験のメカニズム(屋代)

そこで、被験者の記述に対し、既存の景観論に基づき、その要因の分類化を行う際のルールを設定する。

要因の分類化は、篠原の景観把握モデル⁹⁾ (図-2) に加えて、被験者の景観体験に着目するため、屋代が考案した景観体験のメカニズム¹⁰⁾ (図-3) に基づいて行った。

屋代は「いわゆるデザイン」と「景観デザイン」の相違を、「物」を対象としたデザインと「こと」を対象としたデザインの違いとして捉えた。また、「こと」としての景観を「景観体験」として定義し、その体験のメカニズムを時間軸を含めたモデルとして提案している。これは、景観体験において重要な要因を挙げていることに特徴があり、その操作対象は、「先行体験」、「知的情報」、「視点近傍の環境」、「主体の活動(運動)」、「視点と景観対象」の5つである。これは、景観体験において、「主体」、「環境」に加え、「時間」を考慮したモデルであり、シーン景観の連なりであるシーケンス景観も景観体験の構成要素として捉えているといえよう。つまり、この景観体験のメカニズムは、眺めるという行為以外の要因も含めて景観を理解しようとするモデルである。これは、本研究における被験者自身に内在する最も記憶に残った景観体験の要因の分類化を試みる意図に適合している。

被験者の記述の要因を分類するにあたって、景観体験のメカニズムに基づいて筆者が検討した枠組みを以下に示す(図-4)。眺める行為によって得られる景観対象の色や形、大きさ等に対し、意味づけを行う要因について、大きく3つに分類を行った。まず、対象地やその周辺において、においや風、音、湿度・温度、時刻、季節等、景観対象に対し移ろいを与える「環境」的な要因を環境的要因と定義する。

次に、「主体」に着目した場合の対象地における活動(運動)や、反復活動を含む習慣的な経験に関する要因を活動的要因とし、外部での経験、一般的な知識や知的情報の要因を知的要因と定義する。

以上を通じ、被験者の記憶に残る景観体験について、要因の分類化を行った(図-5)。例を挙げると、視点場における「おじいちゃんのお墓があるんですよ。で、その山があつて」は、祖父の墓がある外部での知識が読み取れることから、知的要因となる。また、「歩きながら

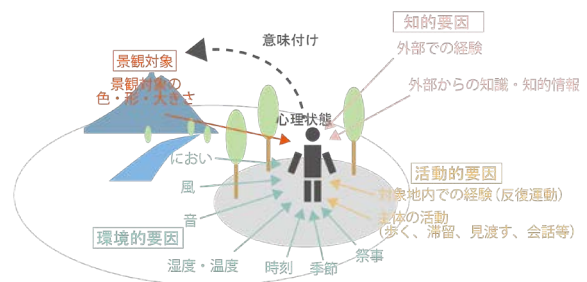


図-4 景観体験のメカニズムの要因 (筆者作成)

1) 要因の種類ごとに色で分類

視点場

(例) 立田山に、個人的な話だけとおじいちゃんのお墓があるんですよ。で、その山があって、歩きながら振り向いた時にいいなあって思います。

主対象：道

(例) 歩いていた時に、朝の空気が気持ちよかったです。



副対象：川

(例) 私そこに住んでいるんだけど、ここで引越しの時にまずこう川があって、昔この辺に住んでたんだけど、やっぱり川があってこの道をいつも散歩できるのがいいですね。

2) 要因間の関係を表現

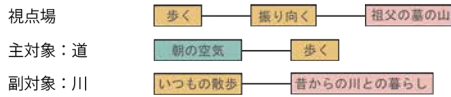


図-5 ヒアリングの記述の要因分類のルール

振り向いた時 の歩行や、振り向くといった視点場での主体の活動が読み取れるものについては、活動的要因とした。さらに、「朝の空気が」など、景観対象に移ろいを与えるものが読み取れる場合は、環境的要因とし、各被験者の記述について、視点場、主対象、副対象の景観構成要素ごとに分類を行った。また、これらの景観構成要素ごとの記述の内容にも、例の視点場（この被験者は主対象、副対象でも起こっている）のように、複数の要因によって構成されているものが多いことから、要因間の関係を考察するために、線をつないで表現した。

みを捉えたものを①内部景観タイプ、内部にあるものと外部にあるものを両方捉えているものを②内部-眺望景観タイプ、外部を捉えているものを③眺望景観タイプ、さらに、視点場が外部にある眺め方を、④外部景観タイプと定義する(図-7)。また、これらの数を確認すると、①内部景観タイプは 11 人、②内部-眺望景観タイプは 11 人、③眺望景観タイプは 12 人、④外部景観タイプは 12 人であった。

3. 全体的な傾向

(1) 景観対象の眺め方

被験者 46 人に対し、視点場の位置及び景観対象の位置について平面図に記し確認を行った(図-6)。まず、視点場に着目すると、緑の区間の内部から眺めた風景と、緑の区間の外から、緑の区間を含めて眺めたもの大きく 2 つに分類することができる。また、内部から眺めたものに着目すると、景観対象が緑の区間の内部にあるものを捉える眺め方、内部にあるものと外部にあるものを捉える眺め方、外部のみを捉える眺め方の 3 つが確認できた。ここでは、内部からの眺め方のうち、内部空間の

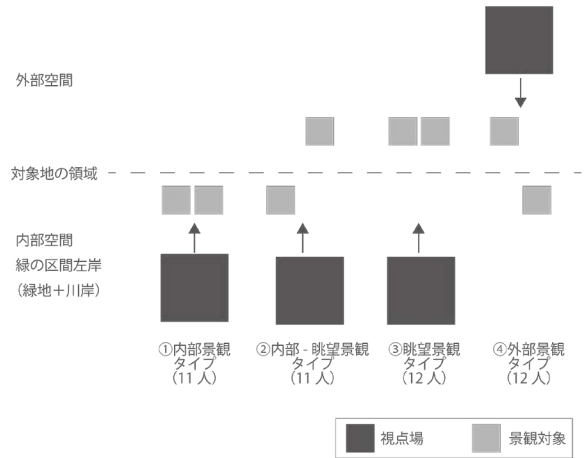


図-7 景観対象の眺め方

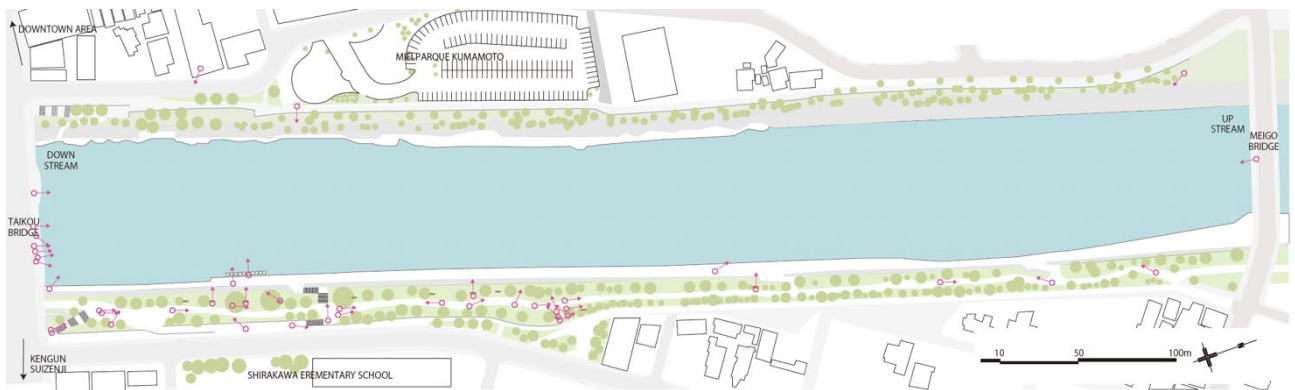


図-6 抽出された風景体験の視点場の位置と景観対象の方向

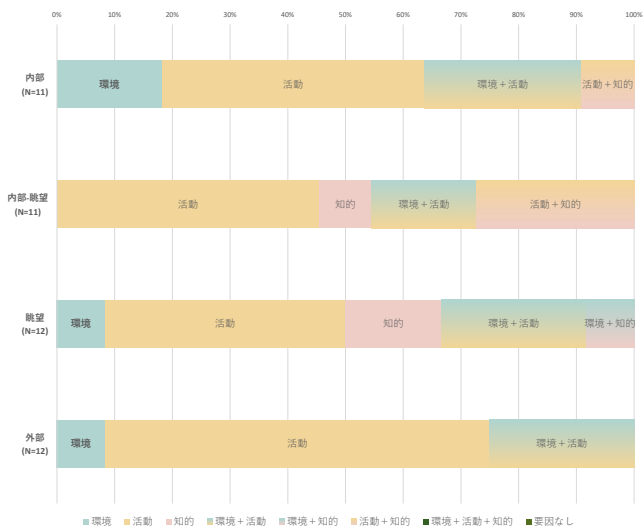


図-8 視点場に働いた要因

表-2 視点場に働いた要因

	活動的要因	環境的要因	知的要因
内部	82%	45%	8%
内部-眺望	92%	18%	36%
眺望	66%	19%	36%
外部	92%	33%	0%

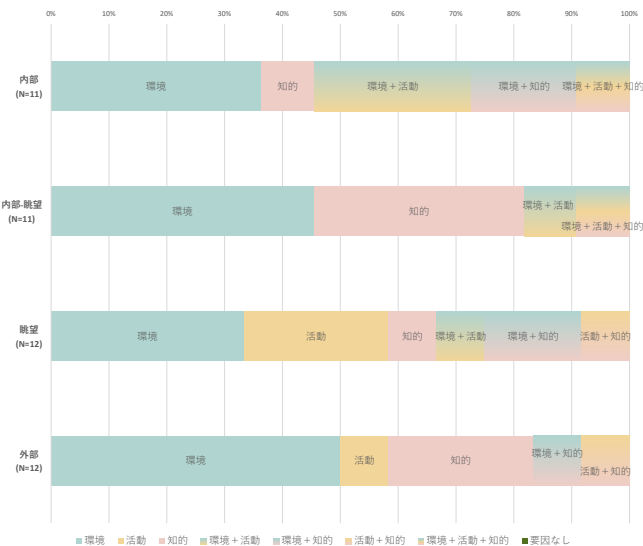


図-9 主対象に働いた要因

表-3 主対象に働いた要因

	活動的要因	環境的要因	知的要因
内部	35%	91%	37%
内部-眺望	18%	64%	46%
眺望	41%	58%	33%
外部	16%	58%	41%

(2) 各眺め方の全体傾向

前節で確認した4つの眺め方について、影響している要因を整理し、傾向を確認するために、それぞれの眺め方の景観構成要素ごとに要因の割合を算出した。

a) 視点場 (図-8, 表-2)

視点場は、どのタイプにおいても活動的要因が中心となって働いていることがわかる。活動的要因が単独で働いている割合が高く、どのタイプにおいても40%以上

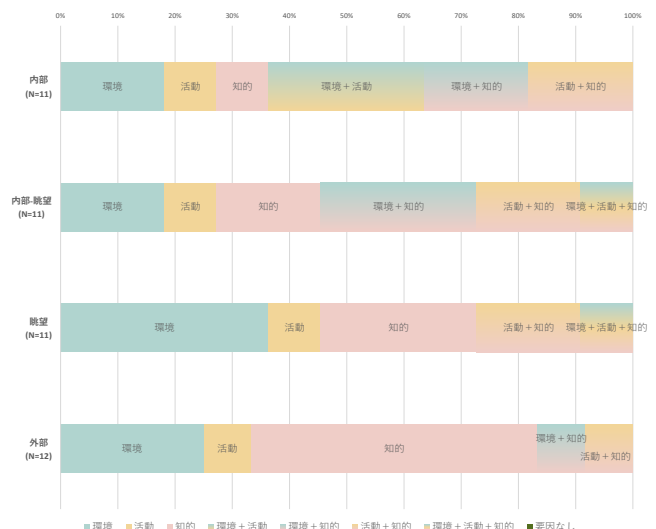


図-10 副対象に働いた要因

表-4 副対象に働いた要因

	活動的要因	環境的要因	知的要因
内部	54%	63%	45%
内部-眺望	36%	54%	72%
眺望	36%	45%	54%
外部	16%	33%	66%

の高い割合を占めている。また、内部景観タイプ、内部-眺望景観タイプ、外部景観タイプにおいては、複合的な要因も含めると、活動的要因が占める割合が80%を超えており、視点場において重要な要因であることがわかった。

b) 主対象 (図-9, 表-3)

主対象は、どのタイプにおいても環境的要因が中心となって働いているのが特徴である。どのタイプにおいても、複合的な要因も含めて約60%以上を占めており、主対象において環境的要因が重要になっていることがわかる。特に内部景観タイプでは、複合的な要因も含めると90%以上が環境的要因となっている。

c) 副対象 (図-10, 表-4)

副対象は、複合的な要因も含めて知的要因が中心に働いていることが特徴である。また、知的要因が単独で働いているものに注目すると、内部から眺めたものは、対象が外に広がるほど、割合が高くなっていることがわかる。一方で、外部景観タイプは、約50%を含んでおり、視点場の位置によって知的要因の働き方に違いがあることがわかる。また、内部から眺められたものは複合的な要因も含めて環境的要因も多く含まれており、中でも眺望景観タイプは環境的要因が単独で働いている割合が高い。

4. 各タイプに働く要因の内容分析

本章は、前章の各タイプの全体傾向を踏まえ、各景観構成要素に働く要因について、詳細に分析を行う。まず、

各タイプに働いている要因について、内容を確認し、特徴を把握する。その後、これらの特徴を詳しく確認するために、要因間の関係をみて考察を行っていく。

(1)各タイプにおける景観構成要素に働く要因の内容

各タイプにおける景観構成要素に働いている要因を把握するため、各要因（環境的要因、活動的要因、知的要因）の内容について確認を行った。要因の内容は、図-4に示す項目に沿って分類を行い、表にまとめた。また、前節の各タイプの特徴があった要因については、表中に着色し表示している。

a)内部景観タイプ

内部景観タイプ（表-5）は、各要因の内容の全体に対する割合をみると、時刻、季節、祭事などの視覚的な環境的要因と、いつもの、昔からといった反復運動の活動的要因が高く働いていることが特徴である。また、視覚的な環境的要因の内訳を確認すると、16個中11個が季節に関する要因となっており、このタイプは季節の変化を捉えていることに特徴がある。

次に、それぞれの景観構成要素に着目する。

視点場は、時刻、季節、祭事などの視覚的な環境的要因が中心となって働いている。また、その時の活動についての要因や、反復運動の習慣的な要因が多く働いているが、特に習慣的な活動が多いことが特徴であった。

次に、主対象は、環境的な要因を中心に、季節の変化といった視覚的な要因や、音などの視覚以外の要因が働いていることがわかる。

副対象は、特に季節の変化といった視覚的な環境的要因、反復運動の習慣的な活動要因、外部からの知的要因が働いていることが読み取れる。

ここで、内部景観タイプにおける特徴である、視覚的な環境的要因と反復運動の習慣的な活動的要因についてみると、どちらの要因も、どの景観構成要素においても偏りなくよくみられる内容であることがわかる。そのため、どの景観構成要素も似た要因で構成されていることが特徴的であることから、眺める場としての視点場と、眺める場としての対象場が連続しており、一体的に捉え

た景観体験であることが考えられる。

b)内部-眺望景観タイプ

内部-眺望景観タイプ（表-6）は、各要因の内容の全体に対する割合をみると、時刻、季節、祭事などの視覚的な環境的要因と、歩く、滞留といったその時においての活動的要因、外部からの知的要因が高く働いていることが特徴である。また、それらの内訳を確認すると、視覚的な環境的要因では14個中9個が季節に関するもの、その時においての活動的要因は12個中8個が歩行に関するものであった。

次に、それぞれの景観構成要素に着目すると、視点場は、歩く、滞留するといったその時においての活動的要因が良く働いている。中でも、歩行といった、シーケンス景観を体験するような要因が高く働いているが、ここで、同内容について主対象、副対象をみると、これらの内容は多く見受けられない。つまり、全体的な割合の中で、活動的要因が特徴的であったことは、視点場においてのその時の活動が大きく貢献しているといえる。

次に、主対象は、環境的要因や、知的要因が多くみられた。環境的要因では、音や風、湿度・温度・空気感といった視覚以外の内容や、時刻、季節、祭事など視覚的な要因の内容など、さまざまな環境的要因の内容が確認できた。また、視覚以外の内容は、他の景観構成要素では確認できず、主対象のみにみられた。

副対象は、季節の変化といった視覚的な環境的要因が多く働いていることがわかる。また、知的要因においても良く働いており、この特徴は主対象と同様である。一方で、前章において中心的には働いていることが把握できなかった要因のなかでも、反復運動の習慣的な活動要因も働いていることがわかる。

ここで、内部-眺望景観タイプにおける特徴である、視覚的な環境的要因、その時においての活動的要因、外部からの知的要因についてみると、眺めの場としての視点場においてその時点における活動的要因が、主対象、副対象に視覚的な環境的要因及び知的要因が働いていることがわかった。そのため、視点場と対象場が不連続であり、境界が曖昧な景観体験であることが考えられる。

表-5 内部景観タイプの要因の内容

要因	要因内容	視点場		主対象		副対象		合計		%
		個	個	個	個	個	個	個	個	
環境的要因	において	1		1				2		16.4
	音			3		1		4	9	
	風	1		1	5		3	2		
	湿度・温度・空気感					2		2		
	時刻	1		2				3		
	季節	2	4	5	7	4	5	11	16	
祭事	1				1		2		29.1	
活動的要因	運動（歩く）	1				0		1		9.1
	運動（滞留）	3	4					3	5	
	運動（見渡す）							0		
	運動（会話）					1		1		
	反復運動（いつもの・昔から）	6	6	4	4	5	5	15	15	
知的要因	外部からの知識・経験	1	1	4	4	5	5	10	10	18.2
合計		16		20		19		55		

表-6 内部-眺望景観タイプの要因の内容

要因	要因内容	視点場		主対象		副対象		合計		%
		個	個	個	個	個	個	個	個	
環境的要因	において							0		7.14
	音			1				1	4	
	風			1		4		0	1	
	湿度・温度・空気感					2		2		
	時刻	1		2				3		
	季節	2	3	3	3	6	4	5	9	
祭事			1		1		2		25	
活動的要因	運動（歩く）	6		1				7		21.4
	運動（滞留）	3	9			1	1	4	12	
	運動（見渡す）							0		
	運動（会話）							0		
	反復運動（いつもの・昔から）	3	3	1	1	4	4	8	8	
知的要因	外部からの知識・経験	4	4	7	7	7	7	18	18	32.1
合計		19		19		18		56		

c) 眺望景観タイプ

眺望景観タイプ（表-7）は、各要因の全体に対する割合をみると、音や湿度・温度・空気感などの視覚以外のものや、時刻、季節などの視覚的な環境的要因、歩く、滞留、見渡すなどといった、その時における活動的要因、知的要因が高く働いていることが特徴である。これらの要因は、合計で約95%を占め、眺望景観タイプを構成している代表的な要因であるといえる。また、それらの要因でも、要因数をみると特に音や時刻に関するもの、滞留活動や外部からの知識・経験は特に多い。一方で、反復運動の習慣的な要因は約5%となっている。これより、眺望景観タイプはこれまでの緑の区間における景観体験の経験より、その時点における現象や活動を記憶しているものが多いことが特徴であると考えられる。

ここで、それぞれの景観構成要素に着目すると、視点場においてその時の活動的要因である滞留活動や見渡すといった行為が大きく働いている。ここで、同内容について主対象、副対象をみると、これらの内容は多く見受けられない。つまり、全体的な割合の中で、約33%の最も多い割合を占めた、その時点における活動的要因が特徴的であったことは、視点場の要因が大きく貢献しているといえる。また、前章において中心的には働いていることが把握できなかった要因のなかでも、視覚以外の環境的要因である音も多く働いていることがわかった。

主対象においては、視覚以外の環境的要因である音や、視覚的な環境的要因である時刻に関するもの、知的要因が働いていることがわかる。特に、視覚的な環境的要因である時刻に関するものは多く、朝や夕方、夜において眺められた対象が、主対象として選択されている。

副対象においては、視覚以外の環境的要因である音や、視覚的な環境的要因である時刻、知的要因がかかわっていることがわかった。特に、副対象では知的要因が働いているものが多く、眺めの中で知識のあるものや、外の領域での経験したものを選択しているものが多いことが特徴である。

ここで、眺望景観タイプにおける特徴である、視覚以外の環境的要因、視覚的な環境的要因、その時において

表-7 眺望景観タイプの要因の内容

要因	要因内容	視点場		主対象		副対象		合計	
		個	個	個	個	個	個	個	%
環境的要因	におい							0	
	音	4	5	3	3	3		10	20.4
	風							0	
	湿度・温度・空気感	1						1	
	時刻			7	3	3		10	
活動的要因	季節			1	8		3	1	11
	祭事							1	
	運動（歩く）					1	1	0	
	運動（滞留）	8	12	2	3	1	3	11	18
知的要因	運動（見渡す）	4		1		1		6	
	運動（会話）							0	
	反復運動（いつもの・昔から）	1	1	1	1	1	1	3	5.56
	外部からの知識・経験	1	1	3	3	7	7	11	20.4
	合計	19	18	17				54	

の活動的要因、外部からの知的要因についてみると、眺めの場合としての視点場においてその時点における活動的要因が、眺めの対象としての主対象に視覚的な環境的要因、副対象に知的要因、また視点場と対象場に共通して視覚以外の環境的要因が働いていることがわかった。そのため、視点場と対象場は、それぞれに働く要因は差があるため、不連続に近い特徴があるが、視覚以外の環境的要因が共通して働いていることから、連続的になり、境界が曖昧な景観体験であることが考えられる。

d) 外部景観タイプ

外部景観タイプ（表-8）は、各要因の全体に対する割合をみると、時刻、季節、祭事など視覚的な環境的要因や、歩く、滞留、見渡す、会話などその時の活動的要因、知的要因が多く働いていることがわかる。これらの要因は合計で約76%であり、外部景観タイプの景観体験を構成する重要な要因である。また、この特徴は内部-眺望景観タイプと似ている。

ここで、それぞれの景観構成要素に着目すると、視点場では、その時の活動的な要因である歩きや、見渡すなどの行為が多くかかわっている。この内容について主対象、副対象をみると、これらの内容は多く見受けられない。つまり、全体的な割合の中で、その時点における活動的要因が特徴的であったことは、視点場の要因が大きく貢献しているといえる。

主対象は、視覚以外の環境的要因である音、視覚的な環境的要因である時刻、知的要因が多く働いていた。特に、視覚以外の環境的要因や時刻に関する環境的要因は主対象のみでよくみられた

副対象は、外部からの一般的な知識・経験が、働いていることがわかり、副対象に働いた要因15個に対し、10個と中心的に働いた要因であった。

ここで、外部景観タイプにおける特徴である、視覚的な環境的要因、その時における活動的要因、外部からの知的要因についてみると、眺めの場合としての視点場においてその時点における活動的要因が、眺めの対象としての主対象に視覚的な環境的要因、副対象に知的要因、また共通して視覚以外の環境的要因が働いていることが

表-8 外部景観タイプの要因の内容

要因	要因内容	視点場		主対象		副対象		合計	
		個	個	個	個	個	個	個	%
環境的要因	におい							0	
	音	1	1	3	4	1	1	5	12.5
	風							0	
	湿度・温度・空気感			1				1	
	時刻				5	1		6	
活動的要因	季節	1	3		5	1	2	2	10
	祭事	2						2	
	運動（歩く）			3				3	
知的要因	運動（滞留）	1						1	
	運動（見渡す）	6	11		0	1	1	7	12
	運動（会話）	1						1	
	反復運動（いつもの・昔から）	2	2	2	2	1	1	5	10.4
	外部からの知識・経験			0	5	5	10	10	15
合計	17	16	15				48		

表-9 各タイプに働く要因の内容のまとめ

	視点場と対象場の関係	視点場	主対象	副対象
内部	 連続	<ul style="list-style-type: none"> ●視覚的な環境的要因 (時刻、季節、祭事) ●習慣的な活動的要因 ○その時の活動的要因 (滞留) 	<ul style="list-style-type: none"> ●視覚的な環境的要因 (季節) ●視覚以外の環境的要因 (音) 	<ul style="list-style-type: none"> ●視覚的な環境的要因 (季節) ●習慣的な活動的要因 ○知的要因 (外部からの知識・経験)
内部-眺望	 不連続	<ul style="list-style-type: none"> ●その時の活動的要因 (歩行、滞留) ○習慣的な活動的要因 ○知的要因 (外部からの知識・経験) 	<ul style="list-style-type: none"> ●視覚的な環境的要因 (時刻、季節、祭事) ●知的要因 (外部からの知識・経験) ○視覚以外の環境的要因 (音、風、湿度、温度、空気感) 	<ul style="list-style-type: none"> ●視覚的な環境的要因 (季節) ●知的要因 (外部からの知識・経験) ○習慣的な活動的要因
眺望	 不連続	<ul style="list-style-type: none"> ●その時の活動的要因 (滞留) ○視覚以外の環境的要因 (音) 	<ul style="list-style-type: none"> ●視覚的な環境的要因 (時刻) ○視覚以外の環境的要因 (音) ○知的要因 (外部からの知識・経験) 	<ul style="list-style-type: none"> ●知的要因 (外部からの知識・経験) ○視覚的な環境的要因 (時刻) ○視覚以外の環境的要因 (音)
外部	 不連続	<ul style="list-style-type: none"> ●その時の活動的要因 (歩き、見渡す) 	<ul style="list-style-type: none"> ●視覚的な環境的要因 (時刻) ●知的要因 (知識、経験) ○視覚以外の環境的要因 (音) 	<ul style="list-style-type: none"> ●知的要因 (知識、経験)

わかった。そのため、眺める場と眺める対象場が不連続であり、境界がわけられた景観体験であることが考えられる。

e) 各タイプに働く要因の内容の総括

ここまですを踏まえ、各タイプに働く要因の内容についてまとめたものを示す(表-9)。まず、各タイプに共通することとして、主対象に視覚以外の環境的要因が働いていることがわかる。特に、音については、全タイプ共通で働いている内容であり、主体は音を代表として、視覚以外のものを契機として、眺めている可能性がある。

次に、各タイプの特徴についてみると、内部景観タイプは、眺める場としての視点場と、眺めの対象としての対象場が連続的になっている体験が記憶されている可能性があることが考えられる。一方で、内部-眺望景観タイプ、眺望景観タイプ、外部景観タイプは、視点場と対象場に働く要因に大きく差があるため、その関係が不連続であり、境界が曖昧な体験として記憶されている可能性がある。これらの違いは、まず、眺めている距離が狭いか、広いか大きな違いではあるが、要因の内容を確認すると、視点場に働く活動的要因の違いが大きく影響していると考えられる。視点場と対象が連続になっている可能性がある内部景観タイプは、反復運動の習慣的な活動的要因が主に働いていた一方で、他タイプでは歩く、滞留する、見渡すなどのその時の活動が働いていた。内部景観タイプの習慣的な活動的要因は、対象場においても同様によく見られたことから、対象地における経験の蓄積によって視点場と対象場を連続に捉えやすくなっていることが考えられる。他方で、視点場で行ったその場の活動は、視点場と対象場の関係を不連続にし、より遠くを眺めるといった働きをすることが考えられる。一般的に、例えば展望台からシーン景観を眺める場合や、歩きながらシークエンス景観を体験する場合などは、眺めの方向は自ら定まるとされている。視点場と対象場が不連続であった体験は、眺めのなかで時刻や外部からの知

的要因など、その時の美しいものや、関心や経験があるものを選択している可能性があると考えられる。また、眺望景観タイプのように、視点場と対象場に働く要因自体は差があるものの、視覚以外の環境的要因などの要因を契機として、視点場と対象場が一体的になっているケースもありえる。ここまでの考察は、あくまで定量的な分析による大まかな傾向からのものであることから、景観体験の内容を確認し、これらの代表的な要因が、他要因とどのように関係しているか、丁寧にみて分析する必要がある。そこで、次節では、本節で特徴的であった要因について、各タイプの景観構成要素ごとに要因間の関係を詳しくみていく。

(2) 各タイプにおける景観構成要素に働く要因間の関係

前節では、各タイプの要因の内容について分析を行い、傾向を理解したが、本節では、これらの内容が各景観構成要素でどのように関係しているのかについて、詳しくみていく。また、特徴のある関係について、その一例を図に示した。また、理解しやすくするため、図においては、図-5の色付けに従い、視覚以外の環境的要因には二重線を、反復運動の活動的要因、外部の経験を伴う知的要因に点線で囲って示している。

a) 内部景観タイプ

内部景観タイプの特徴的な要因間の関係を構造化したものを図-11に示す。

まず、視点場は、前節においての特徴的な要因をみると、ここでは、習慣的な活動的要因と、季節の変化が対比されている関係、その時の活動的要因が単独で働いている2つの特徴がよくみられた。前者は、視点場で特に見られた関係である。これは、視点場に主体の経験があるうえで、日常の景観体験と異なる季節の変化が感じられた場面を記憶していることが考えられる。これまでの利用を通じた経験は、主体の視野を対象地内に誘導し、視点場付近を眺めるきっかけとなっている可能性がある。

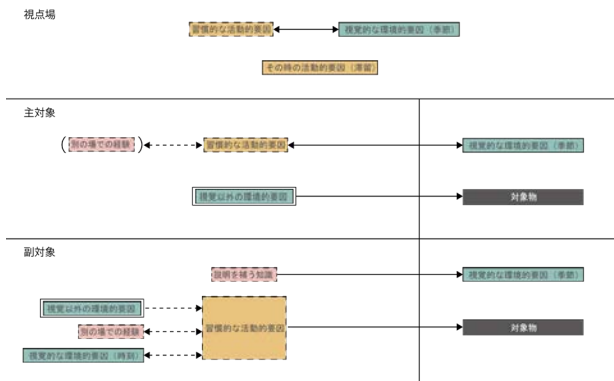


図-11 内部景観タイプの要因間関係

次に、主対象は、習慣的な活動的要素と、季節の変化が対比している関係、視覚以外の音などが働いていることが特徴である。前者は、視点場でもみられた関係である。この関係は、季節と習慣的な活動の対象地内での経験の対比に対し、季節を感じられるものが主対象として選択されている。また、図の点線で示すように、その対比関係に加え、さらに別の場での経験が副次的に対比されている、二重の対比もみられた。対象地の日常体験と異なる体験を行っている際に、さらに他の場と対比することで、対象地の特徴を強く認識していることが考えられる。後者は、目には見えない音やにおいが、主体に眺める契機を与えていると考えられ、それらが感じられる景観対象物を主対象として記憶されたものであると考えられる。

最後に、副対象は、季節的な変化を中心に捉えている関係と、習慣的な活動的要素が中心に働いている関係の2つの特徴がみられた。前者は、緑の区間の中の季節的な変化がみられるものが主対象として選択され、それに対し、例えば「立派な」や「大きな」など、説明を補足する知的要素が働いているものも良く見られた。そのため、これらの知的要素が働いているものには、季節的な変化がみられる対象物のなかでも、「クスノキ」などの緑の区間の樹木の中でもシンボルとなっているものを眺めて記憶しているものが多かった。後者は、習慣的な経験がある対象物を副対象として選択しており、習慣的な経験の様子を表す、温度や空気感など、その活動を支えている視覚以外の要素や、別の場での経験や、普段見えない時刻に見た景色などが対比されているといった、景観対象物の背景を説明する、副次的な関係がみられた。

b) 内部-眺望景観タイプ

内部-眺望景観タイプの特徴的な要因間関係を構造化したものを図-12に示す。

まず、視点場で見られた関係のうち、大半の体験者にみられた歩行運動について考察を行うと、歩行運動からその際に見えている景観対象である、季節や知っているものなど、物的な要素を含めて視点場に影響していた。つまり、眺めている対象物まで、視点場として捉えてい

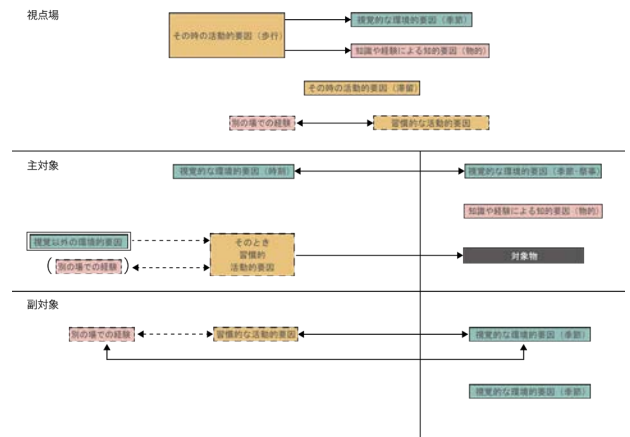


図-12 内部-眺望景観タイプの要因間関係

ることが考えられる。

主対象は、夜間時の空間の暗さなどの時刻的なものと、白川夜市の屋台の光など、視覚的な環境的要素同士で対比されている関係や、眺めの中の知っているものや経験がある物的な対象を捉えているもの、風や朝の空気の澄みなどの視覚以外のものが、歩行や習慣的活動を支えている関係がみられた。中心的にみられた視覚的な環境的要素と知的要素の関係について考察すると、視覚的な環境的要素同士で対比する関係は、特に時刻に関する要素が働いていることから、明るい⇔暗いなどの、視覚的に逆になるもの同士のギャップが記憶に残りやすいと考えられる。特に緑の区間においては、夜間時に照度が確保されすぎていることはないことから、より印象に残りやすいのではないかと推測できる。また、この関係では、屋台の光や紅葉などのように、引き立てられているものが主対象として選択されていたことも特徴である。

最後に、副対象では、季節的な対象物が、副対象として選択されていることが、特に多く、単独で働いているものもみられた。また、習慣的な活動や、他の場所での経験と対比し、いつもの経験と異なる季節の変化や、その良さを捉えているものも多くみられた。その中でも、点線で示すように、さらに習慣的な経験と別の場所での経験を比べている、副次的な対比もみられた。

c) 眺望景観タイプ

眺望景観タイプの特徴的な要因間関係を構造化したものを図-13に示す。

まず、視点場は、滞留行動が単独で視点場に影響している関係に加え、静かな、音楽、木陰など、滞留場の居心地を支える要素が入っている関係も多くみられ、特徴的な関係であった。また、電車の音のように、緑の区間の外に存在するものの音が、視点場に影響している関係もみられた。以上より、眺望景観タイプの視点場は、滞留行動ができる場から眺めるといった、展望台のように、まさに眺める行為の特徴がみられた。そのため、視点場と対象場の関係は不連続であり、視点場から何かを眺め

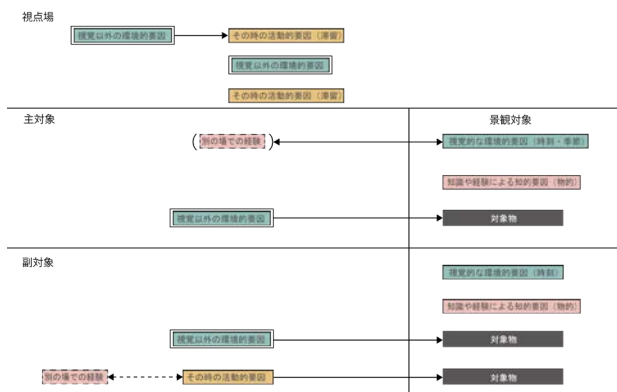


図-13 眺望景観タイプの要因間の関係

るという眺め方が中心であるといえる。一方で、電車の音のように、外から音を発するものに反応し、視線を誘導されるものもしばしばみられ、その場合は外の対象も視点場に含まれるため、視点場と対象場は連続になることがわかった。

次に、主対象は、時刻に関する対象物を主対象としているものに加え、その時刻的な眺めと他の場所を対比している関係、眺めのなかで知っているものや経験があるものを捉えている関係、音などが働いて、その発する電車や川を捉えている関係などの特徴が確認できた。これらの関係は、時刻と他の場を対比されている関係はみられたものの、数としては少なく、それ以外は、単独で働いている要因が多い。よって、例えば、内部景観タイプや内部-眺望タイプでみられた、これまでの経験や他の場所など、景観対象物と何かを連想したりする関係よりも、眺めの中で何かを眺めているといった、眺める行為としてはシンプルなことに特徴がある。

最後に、副対象では、時刻に関するもの、知っているものや経験のあるものを捉えたものや、外の電車を中心に音を発する対象物を捉えたもの、視点場の滞留行動を中心として、そこから眺めたものを副対象として捉えた関係がみられた。最後の、視点場の滞留行動と眺めたものを捉えた関係は、その眺めと別の場所を対比しているものも良く見られた。これは、緑の区間ならではの滞留行動について、緑の区間周辺やまちなかと比べ、活動ができる空間としての良さを再認識していると考えられる。一方で、副対象の特徴は、主対象と同じく、眺めの中で何かを眺めているといった捉えられ方がよくみられる。よって、眺望景観タイプの景観対象としては、主対象と副対象に大きな変化はなく、眺めの中で主体が特に好印象的だったものを主対象として選択していることが考えられる。

d) 外部景観タイプ

外部景観タイプの特徴的な要因間の関係を構造化したものを図-14に示す。

まず、視点場は、特に見渡す行為はよく見られ、外部

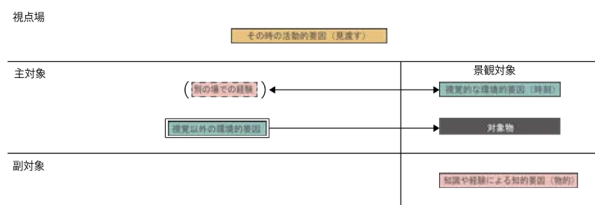


図-14 外部景観タイプの要因間の関係

景観タイプの体験者のほとんどが視点場において、見渡しながら広い視野をもって眺めている様子がかがえた。また、図-6の外部景観タイプの分布をみると、大甲橋や明午橋に集中していることもわかるが、これらは緑の区間の緑地と比べて高い場所に位置している。ここからの眺めは、白川とその両岸で形成されるビスタ景や、その奥のアイストップとなる立田山が眺められることから、緑の区間周辺の眺望ポイントであるといえる。緑の区間は、その景観の一部として、添景として捉えられていることが考えられる。

次に、主対象は、時刻に関する要因が単独で働いているものが良く見られたが、それを眺めた際に、他の場所での経験と比較する関係や、音などを発する対象物を主対象として選択している関係などが特徴的であった。前者は、市街地での都市の暮らしと対比しているものがみられた。良好な景観を確保できる視点場から、緑の区間を含めた自然環境や、河川景観が望むことを通じて、上記のようなものと対比しやすくなっていると考えられる。後者は、大甲橋を走る電車の音を、眺める際に聞いたときに景観を記憶したことが考えられ、ただ眺めたときでなく、眺めている間の音が場面として記憶されるきっかけとなっていると考えられる。

最後に、副対象では、眺めのなかの知っているものや経験のあるものを副対象として捉えており、単なる眺めの中の物的なものだけでなく市街地の風景や、故郷の風景、コロナ渦で見続けていた社会の風景などと対比されているものが多かった。主対象でも述べたが、白川の河川景観や緑の区間をはじめとする自然環境の豊かさや、白川夜市などの賑やかさが、主体にさまざまな感情を想起させていると考えられる。

e) 景観構成要素に働く要因間の関係の総括

以上より、景観構成要素に働く要因間の関係をまとめる。まず、視点場と対象場について、各タイプの特徴を図-15にまとめた。はじめに、内部景観タイプは、内部空間での習慣的な活動を通じて、経験が蓄積されていることがわかり、それにより視点場、対象場が一体的になっていると考えられる。次に、内部-眺望景観タイプは、前節では、視点場と対象場が不連続である可能性があることを述べた。しかし、歩行体験を通じて眺められた景観に対し、その景観対象も視点場に含まれていることから、それによって視点場が広がり、対象場と連続的にな

っていると考えられる。次に、眺望タイプは、主に滞留行動によって、視点場から景観対象を望むといった、より眺望行為に近い眺め方になっていると考えられる。そのため、視点場と対象場は互いに独立しており、不連続な関係であると考えられる。一方で、眺めのなかの音によって眺める契機を当たられた際は、視点場が広がり連続的な関係になっていると考えられる。最後に、外部景観タイプは、俯瞰する、見渡すといった眺望行為が多く、良好な眺めができる場が視点場として選択されていた。また、そこから緑の区間を添景として捉えられていたことも特徴である。また、眺めの契機として働いた音も視点場近傍にあったことから、以上より、視点場と対象場が互いに独立している、不連続な関係になっていると考えられる。

次に、主対象、副対象に見られた要因について、環境的要因、活動的要因、知的要因の働きや関係の共通性について図-16にまとめた。ここでは、主対象、副対象について直接影響を与えた要因を一次的要因、一次的要因を補うように働いた要因を副次的要因とおくが、図-16は、一次的要因に着目してそれぞれの要因間の特徴をまとめたものである。

まず、環境的要因は、音やにおい、風、空気感や温度、湿度などの視覚以外の対象物が捉えられている関係と、例えばライトや空間の暗さなど、時刻的に関するものと、紅葉や白川夜市などの、季節や祭事に関するものが対比され、引き立たされた対象物が捉えられた関係が共通していた。特に、視覚以外の環境的要因は2つのなかでもよくみられ、環境的要因の一次的要因として代表的な要因、関係であるといえる。また、これは主体に眺める契機を与える役割として働いており、記憶に残る景観体験では重要な要因であることがわかった。

次に、活動的要因は、まず大きな特徴として、副次的

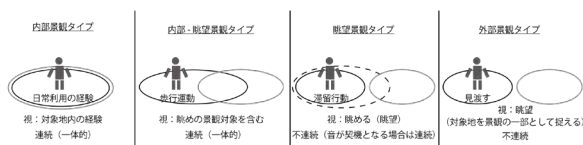


図-15 視点場と対象場の関係

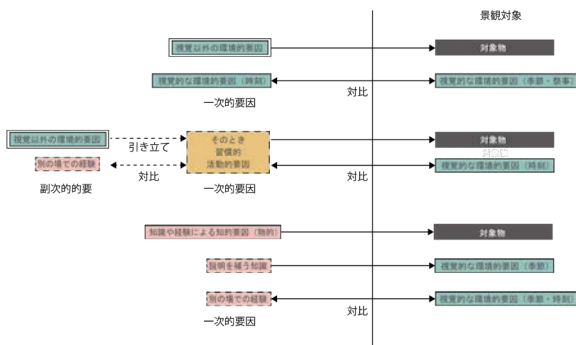


図-16 各要因の働き方のまとめ

要因が唯一見られた要因である。一次的要因として、歩行、滞留するなどのその時における活動が働いている関係や、いつもの利用といった習慣的な活動が働いている関係がみられた。このうち、滞留行動は単独的な要因で働いていることが多かった一方で、歩行や習慣的な活動には、他の場所での経験と対比する副次的な要因や、例えば空気感や温度、風などのその活動を支える視覚以外の環境的な要因が副次的な要因として働いていることが共通していた。これらを通じて、一時的要因は、そこから眺められる対象物を景観対象として捉え、いつもの経験と異なるような季節の変化などを対比していることがわかった。

最後に、知的要因は、別の場所での経験と、緑の区間の季節の変化や、時刻に関する景観対象を対比し、緑の区間の良さや魅力を認識しているものを記憶しているものや、季節的な変化に対し、立派な、大きいなど、その対象物の良さを補足するように働いている関係がみられた。一方で、例えば目の前にある、知っているものを記憶したものなど、眺めの中の対象物を、なんとなく捉えたものもあった。

5. 記憶に残る景観体験の考察と展望

以上までを踏まえ、記憶に残る景観体験のまとめと考察を行う。まず、本研究では、緑の区間の利用者の体験談の記述について、要因の整理及び分析を行った。ここでは、各体験者の眺め方について4つに分類し、その特徴を考察した。3章では、定量的分析を通じて、各タイプの傾向について把握し、4章で各タイプの体験に関わる要因の内容及び各要因同士間の関係について明らかにした。具体的には、各タイプの視点場と対象場の関係を明らかにし、その関係に影響を及ぼす主要な要因や、条件について整理した。また、2章で定義した環境的要因、活動的要因、知的要因について、記憶に残る景観体験における働きや役割について、一次的、副次的な関係を発見し、その関係について整理した。

以上までを踏まえ、各タイプごとの記憶に残る景観体験について、まとめたものを図-17に示す。

内部景観タイプは、主体の日常的な利用、活動の経験を基に、これまでの体験と異なる現象の場面を記憶していることが考えられ、これまでの日常的な利用を支える視覚以外の要因や、対象地の良さを引き立てる外部（他の場所）での経験と対比する、副次的な要因が働いていた。以上より、日常の利用がベースとなり、視点場と対象場が連続（一体的）になっている景観体験である。内部-眺望景観タイプは、季節の変化を中心として、時刻に関する対象物も捉えており、時刻に関する対象物は季

節の変化と対比する働きとして捉えられていた。また、主体は眺める視点場として歩行を通じたシークエンス景観を体験しながら、その中で眺めの方向性を自ら定めており、季節的な変化のある対象物などを捉えていた。また、この歩行体験にも、視点場の運動をより良い要因へ引き立てる視覚以外の要因や、外部の場所での経験と対比する副次的な要因が働いていた。以上より、内部-眺望景観タイプは、視点場でシークエンス景観を体験しながら、その眺めの先も視点場の範囲と捉え、対象場と連続的な関係となる景観体験である。眺望景観タイプは、視点場における滞留行動などの活動から、知っている対象物や、時刻に関する対象物、音などの視覚以外の対象物を捉えていることが特徴である。また、これまでの緑の区間の内部での日常的な利用の経験は関係しておらず、その時点における体験中の出来事を記憶している特徴があった。また、視点場の場所は、滞留行動かつ、良好な景観が確保されている場所であると考えられ、まさに緑の区間の展望ポイントと考えられる。ここでも、視点場と外部の他の場所との経験が対比されている副次的な要因の関係が良く見られ、視点場の良さが引き立てられて

いた。以上より、緑の区間から外部を眺めた眺望景観タイプは、まさに眺望行為をする特徴がみられ、視点場と対象場は不連続的な関係となる景観体験である。ただし、景観対象に外部の音などの視覚以外の要因が、眺める契機として働いた場合は、視点場と対象場は連続的な関係になる。最後に、外部景観タイプは、視点場に見渡すといった眺望行為を中心に、景観対象として時刻に関するものや、知っているもの、他の場所での経験のあるもの、視点近傍の視覚以外の対象物を眺めていることに特徴がある。外部景観タイプも、眺望景観タイプと同様に、日常的な経験の蓄積より、その時の眺望行為から眺めた景観を記憶している体験であると考えられ、景観対象の要因間の関係もシンプルであった。特に、外部からの眺めは、良好な景観が望める場所に集中しており、大きな河川景観の一部として、緑の区間の日常景観や、白川夜市などの非日常の景観を捉えていたことから、他の場所での経験や、過去の思い出、コロナ社会での景観イメージと対比していることが特徴であった。以上より、外部景観タイプは良好な景観が確保された眺望ポイントから、景観対象を俯瞰的に眺めた眺め方であり、視点場と対象場が独立し不連続的な関係となる景観体験である。

今後の展望は、以上の結果を踏まえ、景観デザインへの活用について議論を深めることと、各体験者の視点場、主対象、副対象の関係をさらに精査していくことである。

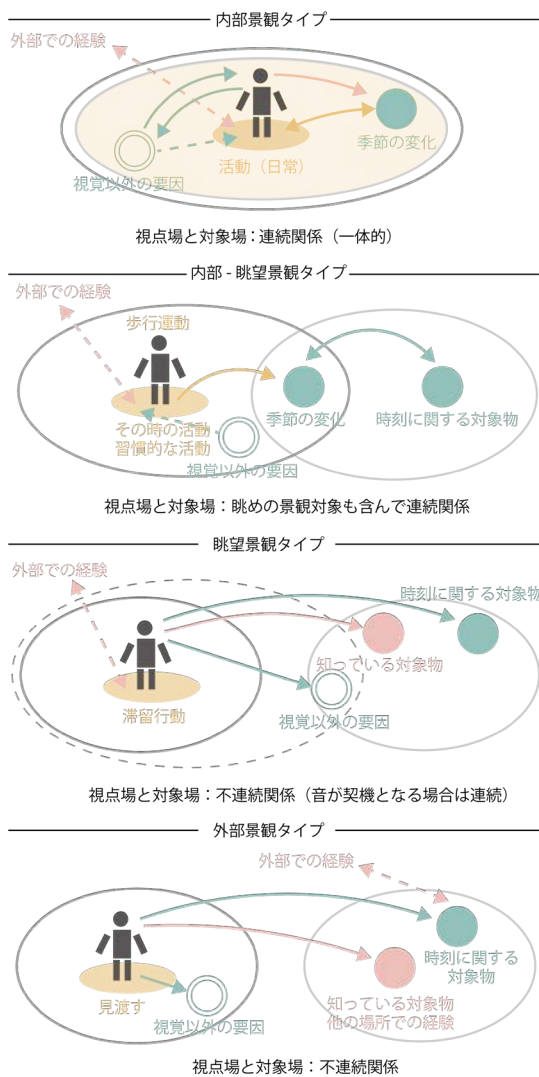


図-17 各眺め方による記憶に残る景観体験のまとめ

参考文献

- 1) K. リンチ：都市のイメージ 新装版，岩波書店，1960
- 2) 上田裕文：風景イメージスケッチ手法の構築に関する研究，日本都市計画学会都市計画論文集，No. 44-3，pp. 37-42，Oct，2009
- 3) 高瀬唯：風景イメージスケッチ手法による日常生活圏内の自然を対象とした風景体験の類型化，ランドスケープ研究，Vol. 11，pp. 70-81，2018
- 4) 尾野薫：都市空間において記憶された経験を捉えるための一試論，土木学会論文集 D1，Vol. 71，No. 1，pp. 133-150，2015
- 5) 中井恵利加：記憶対象と記憶原因からみた住宅の記憶に表れる空間性に関する研究，日本建築学会計画系論文集，No. 590，pp. 1-8，Apr，2005
- 6) 山田あすか：特徴的な屋内外空間を持つ K 小学校における「記憶に残る場面」の分析，日本建築学会計画系論文集，Vol. 80，No. 707，pp. 19-29，Jan，2015
- 7) 伊藤美春：就学前保育施設における成人の記憶に残る建築空間と活動場面に関する研究，日本建築学会計画系論文集，Vol. 80，No. 707，pp. 19-29，Jan，2015
- 8) 北山剛：人の認識に基づく公園・広場の場の類型，土木計画学研究論文集，Vol. 20，No. 2，pp. 401-408，Sep，2003
- 9) 篠原修：景観用語辞典，彰国社，1998
- 10) 屋代雅充：景観デザインの対象と仮想行動のための景観デザイン，思考社所収，1985